あとがき

　この度は『小説　夜のクラゲは泳げない』第一巻をお読みいただきありがとうございます。原作となるアニメのシリーズ構成・脚本を担当し、本ノベライズの執筆も担当しております屋や久くユウキと申します。

　さて、本小説はアニメが始まって一か月半後の五月二十日に発売ということで、順序としてはアニメを見たあとにこちらをお読みいただいている方が多いかと思いますが、お楽しみいただけたでしょうか。あの美麗な映像と演出、魂のこもった演技でできたアニメーションを文章だけで表現するとなると、非常に難しい部分もあったのですが、持てる力を尽くしたので、あの一流の映像に引けを取らないものが書けていればいいなと思っております。

　四章までの内容ですと、特に一章と二章はアニメ本編と違うシーンが見られて驚いた方も多いのではないでしょうか。アニメというものは基本、脚本を書き上げて決定稿にしたあと、それをもとにコンテを作っていくのですが、ヨルクラの場合、竹たけ下した監督が担当する回は脚本をさらに映像としてよいものにしようと、コンテ段階で大きく変更を加えていただくことが多かったので、今回のノベライズは『映像に特化したコンテ』になる前の、『脚本の最終稿』に近い内容になっています。

　そして実はこのあとがきは三か月連続刊行のなかかなりギリギリで書いているので、そうしたアニメと小説の違いなど、説明しやすい制作裏話を解説する場所にしようかなと思っていますので、お付き合いいただけますと幸いです。

　一章で最も驚かれた相違点はやはり、花か音のがギターを持っていないことではないでしょうか。脚本ではもともと本小説のようにマイクを奪い、歌で塗りつぶすところからライブシーンが始まっていたので、「ちゃんと見てろよ、ヨルー！」という叫びはアニメの映像用に監督が加えていただいたセリフということになります。ちょっと驚きですかね？　その後のまひるの髪の毛の動きなど、とても映像として映えていましたよね。

　ちなみにギターを持たせるという変更は単純に、ギターがあったほうが画として保もちやすいし、演技の幅もつけやすいし今後も映像的に便利、というお話だったので、まさに映像を作る人ならではのアイデアで、刺激的な視点でした。

　また、ライブシーンが始まってからの流れの印象も大きく違っていたかもしれません。アニメでは花音の演奏をメインで映しながら、二人の運命が感じられる回想で展開していきましたが、脚本ではまひるの『置いてけぼりになってしまう』という感情線の上下を重視していました。本小説と同じように、歌う花音からぽつんと取り残されるまひるを描き、チエピ、キウイ、そしてまひる自身のセリフを回想しながら、観客に押しのけられて後ろに追いやられてしまう。そして「ＣＤとか出たら買うね、絶対」という自分の言葉の回想に「違う。──本当は」とモノローグを入れたあと、それを反転させるように花か音のの「──私、ヨルのクラゲの前で歌いたいな」がフラッシュバックする、という構成になっていました。

　これも同様に、心情を追ってセリフをつなげるのか、映像としてテンポよく気持ちいいものにしてからセリフにつなげるのか、という媒体の違いによる相違点が大きく出た場面だと思っていて、特にライブシーンとなるとアニメでは音楽と映像のシンクロなども重要になってきます。なので演出か心情か、アニメと小説両方で楽しむ意味が大いにあるシーンになっていたのではないでしょうか。

　その他、小説にあった印象的なセリフがいくつかカットされていると感じたかもしれませんが、こちらの多くは尺の問題や、映像的なテンポを重視したものになっています。セリフ自体はよくても尺に入らない、もしくは重ねすぎるとダラダラしてしまう、というのは映像によくあることなので、このあたりは監督の『いいアイデアももったいないと思わずに切る』という鋭い直感が表れていたと思います。その結果、テンポの良い映像になっていたのではないでしょうか。

　また、丸ごとアイデアが変わっているという意味では、花音がめいのことを木き村むらちゃんだと思い出すキッカケも、アニメと違って驚いたかもしれません。アニメはこぼれた温玉、小説では待ち受け画面を見てまひるが画像加工して思い出しますが、実は脚本では『温玉を見たまひるがめいの待ち受けの写真を思い出し、学生証の写真を加工してみる』という流れになっていました。けれどちょっと段取りが多いよねという話になり、アニメでは温玉のみを残していただいた、というわけです。温玉（などこぼれた食べ物）を見て木村ちゃんを思い出すというのは監督のアイデアなのですが、あの画的なアイデアはアニメならではのもので、小説だと説得力に欠けるかもしれないと思い、小説ではアニメとは別のほうを残しています。これもまた、映像と文字媒体の違い、というところになるでしょう。

　とりとめもなく解説をしてしまいましたが、こうして映像と小説の違いを考えることが、少しでも作品をより深く楽しむための補助線になっていれば幸いです。

　……友とも崎ざきくんから読んでくれてるみんな、フェチ語りはしないぞ。ここでは綺き麗れいな屋や久くユウキを見せなくてならないんだ。

　ということで、それでは謝辞です。

　本書を出版するにあたり尽力いただいた担当の林はやし田ださん、ガガガ文庫の皆さま、カバーを担当いただいたpopman3580さん、モノクロイラストを担当いただいた谷たに口ぐち淳じゆん一いち郎ろうさん。印刷所や書店・販路に関わっていただいた皆さん、動画工房、キングレコードのヨルクラ担当の皆さん。誠にありがとうございました。

　そして、読者の皆さん、アニメを見てくださる視聴者の皆さん。ありがとうございます。

　また次巻もお付き合いいただければ幸いです。

屋久ユウキ